手塚治虫作品―その2『陽だまりの樹』―

2009.05.05 更新

萩原　義雄

歴史のなかに「タイムスリップ」

日本の江戸時代末期から明治時代へと変容する大きな流れの渦にあって活躍する一人の醫師、手塚良庵（後の良仙）の若き日々の一五一十の形勢を描きだす。長編歴史漫画を描き始める契機は、順天堂大學での講演と後日、日本医学界の深瀬泰旦氏からの手紙であった。この内容は「手塚さんの先祖は手塚良庵ではありませんか？」というもので、これに良庵に関わる一連の史料から彼が軍医であり、若き良庵を巡る幕末の人間模様をここに描き出そうと構想したのがこの作品の始まりであった。手塚はこの講演のなかで「私の先祖は醫者でした……」と語ったのである。この醫者という職業から、手塚自身もその血を受け継ぎ、医学の道を志したことをここで話したのである。その先祖こそが、この物語の主人公の一人である手塚良庵その人であった。手塚は、この名前を手紙の文中で知り、正に動乱期の日本を真っ正面から見つめて行こうと決意したのである。とはいえ、「歴史物」であるからして、読者層も大人向けと成らざるを得ない。この作品は折しも手塚自身が手懸けていたコミック雑誌「ビッグ・コミック」に連載することになる。此の作品は丁度八番目に登場させている。

『陽だまりの樹』について

激動期幕末を舞台とするからには、歴史の忠実さと歴史上で名のある人物についても用意周到に史料を読みかえしておく必要がある。この上に漫画ならではの架空の人物像をも想定していくのである。手塚治虫は、吾が先祖である手塚良庵と彼に最も関わり合いを持つ人物として「伊武谷万二郎」という松平藩の下級武士を彼に絡めるのである。万二郎は父の隠居の禄継いで藩に出仕するようになってまだ四ヶ月、禄高は家臣のなかでは最も低い十五俵二人扶持の二十六歳の若武者である。

この物語の滑り出しは、まず巻頭の見開き部分に江戸市中の地図を描き、ここにオープニングのプロローグが書かれている。

江戸小石川、傳通院裏に人呼んで三百坂という路地があった。本来三貊坂という地名であるのに、なぜ俗にこう呼ぶのかはわけがあった。

この坂を上りきると、江戸市中の一等地なのであって、親藩、譜代の大名達の江戸屋敷が軒を連ねて居を構えている。

江戸市中の大俯瞰を東西南北凡て見渡してから、風景の視線はやがて町の屋根屋根を伝わるようにして近づいてくる。やがて、人影を描き出す。この三百坂の江戸屋敷にある松平播磨守〔後、「府中藩松平」と記載〕の登城風景を悠々と描く。読者は一気に百三十年前のこの時代へとタイムスリップすることになる。三百坂の中程を登城に供する徒歩の侍たちが勢いよく駆け出す。日頃の武士として鍛錬の出来映えの程を殿の御前で試す絶好の機会でもある。それも正装に身を固めた姿でもあった。この先頭を切って真っ先に登り切った侍がこの「伊武谷万二郎」なのであった。このとき、手塚治虫のご先祖である良庵さんは、供侍の駆けっこを避けるようにして、坂の中途でじっとしてこの光景を見ているのだが、彼の顔つきは汗びっしょりになって駆け出すこの万二郎の姿を冷笑に見つめている。万二郎も毎朝同じように己の走る姿態をニヤニヤ見ているこの男が癪に触るが登城の公務である故どうすることもできないでいる。

この万二郎と良庵の二人が時に急接近する。或る夜の事である。万二郎の剣の師である千葉周作が急逝

する。この通夜の席で万二郎はいざこざを起こし、血気盛りの彼は清河八郎と真剣で勝負する。このとき怪我を負い、「三百坂の良仙先生」を呼びに行くが、生憎良仙は留守で代わって息子である良庵が代診に向かう。眼と眼が合うか合わないか、万二郎は当に猛獣のように傷のことも顧みず、傷の治療にやって来た良庵を投げ飛ばしてしまうのだ。この結果、良庵は大量に出血して氣絶してしまった万二郎の傷を縫合していく。彼にとって万二郎は初めての外科手術を施した人物となっている。この二人がこの長編歴史漫画の主人公として設定されているのである。身分も置かれた立場も性格も全く異なる二人が各々の遭遇する歴史的事件を通して実体験するのである。辛酸・苦悩・感動をこの二人の主人公を通して私たち読者は教科書に書かれた歴史を手塚の漫画のなかで見つめ直しさらに学ぶことになる。

下級武士の万二郎は、幕下のもと父と同様に誠心誠意仕えている侍である。だが、熱血漢と正義一徹の純朴さが他者との妥協をも許さず、世の処世術すら心得ようとしない若者の一人なのだ。いつ生命を落とすか知れたものではない、暗闇を猛突進する。激動の渦巻く安隠の遠い世界が幕を開ける瞬間でもある。

蘭学医である良庵は、遊興三昧する。万二郎の生き方とは全く正反対のような若者である。蘭学をめざす若者は江戸を離れ、遠く大阪を経て長崎まで勉学の旅をすることも享保年間八代將軍吉宗が和蘭医学を学ぶことを奨励して当時としては世の習わしでもあった。ここで良庵は尊敬する適塾の塾長である緒方洪庵に弟子入りするのだが、その中途遊廓に立ち寄り居続ける有様である。結構凝り性のタイプなのであろう。一度決めたからにはとことん一つのことをやり遂げようとする。限られた時間で、限られた情報を頼りに蘭学をめざす。未知の領域に武者震いしながらもやがて医師としての技術能力を身につけ、その力を蓄積していくのである。将軍家御用を勤める漢方医たちからの差別や迫害にも負けずに新たな医療技術を学び、その普及と確立のために終始奮闘していく。その治療相手が行きずりの遊女であれ、つまらぬ諍事で深手を負った浪士であれ、生命の尊厳をもって真っ向から死と向かいあう。

この二人の主人公たちの行く手にはいつも幕府の腐敗しきった官僚達の自己保持システムがいつも重苦し程

のしかかっている。

http://www.youtube.com/watch?v=hrpND-oNbK0&feature=related
http://www.youtube.com/watch?v=lmTJlzJ4uyM&feature=related
http://www.youtube.com/watch?v=Qva6eQOjfdI&feature=related

『陽だまりの樹』という書名

この作品名を説く場面がある。伊武谷万二郎が山岡鉄太郎〔後の鉄舟〕と一緒に水戸藩の碩学である藤田東湖〔小石川に塾居を解かれ學校奉行の任につかれていた〕を訪れたときである。二人に東湖は、庭の桜の老木を指さし、〔二巻、第10章天地鳴動・81頁〕

これは、この富坂でも一番の老木だそうな。なんでも家康公御入国の際、若木だったそうな……つまりこの樹は、徳川三百年を生きてきたことになるな。ここは陽当たりもええし、風も強うない……。この桜は、ぬくぬくと三百年、太平の世に安泰(あんたい)を保ってきたわけじゃ。

ところが知らぬ間に、これこのとおり白蟻や木喰い虫の巣になってしもうたわい。もうこれは十年もつまいて。徳川の世は、この陽だまりの桜の樹のようなものじゃ。太平の夢をむさぼるうちに、幕府の中にも外にも、白蟻共や木喰い虫共がわいて、樹を食いあらしおった。

おのれの派閥だけを考えて、逃げ腰で無責任なくせに利をむしばむやからが、政府の中にやたらにふえておるわ、獅子身中の虫共だ。このままでは幕府は……いや日本は滅んでしまう。

「では、私たちはどうしたらいいのですか」
と万二郎がたまりかねたように教えを請うのである。東湖は二人の年齢を訊ね、若さを羨ましいともらしたあと、『孟子』のことばを引用し、

「天、まさに大任をこの人におろさんとするや、その筋骨を労し、その身を空乏にする」――わかるかね？
人は安泰の時には仕事をなまけ、苦しいときに励むものだ。だから苦しみにあうことは、次の発奮のきっかけになることだ……。苦しむことだ。若いときは苦しめば苦しむほどよい。これからの十年、たぶん日本は、未曽有の大事件にみまわれるだろう。貴君達は、枯れかかった徳川幕府という大樹の最後の支柱となるんだ。
この東湖の語りの部分こそ、この書名にふさわしき指針であるまいか？ここで一つ考えて置きたい。「安泰」と「危機」というこの言葉の意味する組み合わせとその歴史のあり方についてである。あなた方はどのようにこの桜の老木見つめてみたのであろうか？

①害虫に蝕まれた老いた桜の樹など一刻も早く切り捨ててしまえばいい。
②放うって置けば自然に倒れてしまうだろう。
③老木を生命続く限り活かすための延命處置を施そう。
④老木の桜の樹から実生の種を採って新しい生命を誕生させよう。
⑤其の他……。

安政の大地震

http://www.youtube.com/watch?v=yeMg5WGAuxI&feature=related
http://www.youtube.com/watch?v=5IwkB4YDA3c&feature=related
http://www.youtube.com/watch?v=_mzt8Q4EQdU

〈未完〉